特集■ メスを使わない美容皮膚科はどこまで進歩したか?

3 ボトックスの進歩

古山登隆[1)]
FURUYAMA Nobutaka
井上 香[2)]
INOUE Kaori
1）自由が丘クリニック 理事長
2）自由が丘クリニック

ボツリヌストキシン製剤の歴史

シワに対する治療を希望する患者は年々増加している．中でもボツリヌストキシン(以下，BoNT)を用いた注入療法は，安全かつ短時間で効果を得られる治療法で，その施術数は近年特に増加傾向にある(**図1**)．BoNTによる筋弛緩作用のヒトへの治療は，1977年Scottらにより初めて斜視の治療[1)]にA型ボツリヌストキシン(以下，BoNTA)が使用された．その後眼瞼痙攣[2)]などの眼科領域の疾患においても，効果が確認され，標準的な治療になっている．美容形成外科分野に関しては，1992年Carruthersらが眉間の表情シワに対する効果[3)]を報告し，シワ取りの治療法としてのBoNTの使用が広がっている．現在，医療品として製剤化されているのは，A型とB型ボツリヌストキシンである．わが国における薬剤の適応症は，眼瞼痙攣，片側顔面痙攣，痙性斜頸，上肢痙縮，下肢痙縮，2歳以上の小児脳性麻痺患者における下肢痙縮に伴う尖足，重度の原発性腋窩多汗症，斜視[4)]である．美容においては，2009年1月に米国Allergan社のBoNTA製剤「ボトックスビスタ®」が美容目的の医薬品として，65歳未満の成人において眉間の表情シワに承認され[5)]，また2016年5月，「ボトックスビスタ®」が65歳未満の成人における目尻の表情シワ[6)]に対して追加適応を取得した．2017年には，米国食品医薬品局(Food and Drug Administration：FDA)にて中等度～重度の額のシワ治療の承認を取得している．わが国で使用されている未承認のBoNTA製剤として，ディスポート®(英国・Ipsen社)，ニューロノックス®(韓国・Medy-Tox社)，ゼオミン®(ドイツ・Merz Pharmaceuticals社)，BTXA™(中国・Lanzhou社)，ニューロブロック®(米国・Solstice Neuroscience社)(**表1**)などがあるが，日本人における有効性と安全性のデータを有さないので，使用は医師の裁量に任されている．

美容分野におけるBoNTの使用法は，現在のところ大きく分けると3種類あると考えている．第1には表情シワに対して表情筋を減弱化させる目的で行うもの．第2には，筋肉肥大に対して使用し，筋肉を減量させたり，拮抗する筋肉を弱めることで形態を変化させる

SAMPLE
Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.